

---

# 白い金の輪

山岡屋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い金の輪

### 【Nコード】

N9454T

### 【作者名】

山岡屋

### 【あらすじ】

愛されていると思った事など一度もなかった。私の半生と病床の夫が初めて語る真相。

長年すれ違い続けた夫婦の愛の軌跡。

年齢制限はありませんが、内容は大人の女性向けです。

自サイトと重複投稿

「愛していたよ、おまえだけを。生涯惚れた女は、お母さんだけだ」  
そう言つて私の手を握り、夫は穏やかに微笑んだ。

この人がこんな風に優しく私に触れ、こんな風に笑つのを見たのは何十年ぶりだろう。

いや、元々この人は優しい人だ。

私は重ねられた夫の手を、しげしげと眺める。無骨な手が随分軽く感じられる。布団からはみ出した腕も、細くたるんでいた。

お互い老いたなと、改めて思う。

カーテンで仕切られた狭い空間に、うつすらと射し込む曙光が、達観したような夫の顔に死の影を落としていた。

なぜ今になつて、こんな事を言うのだろう。愛されていると思つた事は一度もなかった。

この人は、男に裏切られた私を憐れんで、一緒になつたのだと思つていたので。

真面目で実直、それだけが取り柄のつまらない男。私が断れば、他に嫁の来手はない。そうやって夫を蔑んで、私は憐れでもかわいそうでもないのだと、自分に言い聞かせて嫁いだ。

戦後とは名ばかりで、まだ国中が貧しかった時代の事だ。

当時の私は山間の村で、家族と共に近所の農家を手伝いながら暮らしていた。

八人兄弟の長子として生まれた私は、幼い頃から兄弟の面倒を見るのが忙しく、学校もろくに行つていない。かろつじて読み書きと計算が出来る程度で、学のない私に出来る仕事など、家の手伝いくらいしかなかった。

いずれは近所の農家の三男坊にでも、嫁ぐ事になるのだろう。

大して希望もないけれど、さして不幸でもない。平凡な日々を漫

然と繰り返していた時、

私は”彼”に出会った。

家の遣いで町へ向かうバスの中、偶然隣に座ったのが彼だった。山間の村から町へと続く単調な道のりに退屈して、ぼんやりしている私に彼は親しげに話しかけて来た。

二枚目俳優によく似た陽気で明るい彼に、私は一目で虜なつた。

家に帰っても彼の事が忘れられず、気が付けば家出同然に飛び出して、町へやって来た。

バスの中での会話を頼りに、彼の家を探し歩く。日が暮れかかる頃、ようやく彼の営む小料理屋を探し当てた。

彼は始め少し驚いたようだったが、快く私を迎え入れてくれた。

私は店の奥にある彼の家で、店を手伝いながら彼と暮らし始めた。

このまま彼と二人で幸せな生活が続くと信じていたある日、彼がまだ十代だと思える少女を一人連れて帰った。

身よりもなく行く当てのない少女を、彼は家に置く事にしたと言った。

私の時と似ている。私も家に居場所がないと言って、彼に縋った。薄々感付いてはいたが、彼は整った容姿と人当たりの良さで女を引きつける。そして来る者を拒まない。

突然転がり込んできた少女は、若い事を理由に何も出来ないと言張して、店の手伝いも家の事も一切しない。

少しは何か手伝うように言つと、まるで私がいじめているかのようになにに彼に告げ口をする。そして彼のいないところで、私に悪態をついた。

私が少女を煙たく思っているように、彼女も私が邪魔なのだろう。彼に訴えても、子供のやる事にいちいち目くじら建てるなど、取り合ってくれない。

少女は若い事を武器に、わがまま放題で私を追い詰め、その若さで夜は彼を独占した。

ふすま一枚で隔てられた隣の部屋で、毎夜のように少女が、これ

見よがしに嬌声を上げる。

とうとう耐えられなくなった私は、雨の夜雨音に紛れて、彼の家を飛び出した。

家出同然に出てきた生家には戻れない。私は町の近くにある村に住む伯母を頼った。

深夜ずぶ濡れで訪れた私を、伯母夫婦は何も聞かずに迎え入れてくれた。

翌日伯母から、両親が探していた事を知らされた。私は仕方なく家に戻れない事情を話す。

話している内に涙が溢れて止まらなくなった。私は彼に裏切られたのだ。

いや、そうじゃない。彼は元々そういう人だ。私に見る目がなかったのだ。

子供のように泣きじゃくる私を、伯母は優しく慰め、家には一応連絡するが、気持ちが落ち着くまで、ここにいていいと言ってくれた。

伯母夫婦には子供がいない。けれど決して裕福なわけではない。食いぶちがかさめば、それだけ家計に負担が掛かる。

家計の足しになる仕事を何も出来ない私は、せめてもの恩返しに家事を率先して手伝った。

伯母の家に身を寄せてしばらく経った頃、伯母が縁談を持ちかけてきた。相手は近所に住む若者だという。

体のいい厄介払いだと思った。

嫌なら断ってもいいと言われたが、居候の私に断る権利はない。

言われるままに見合いをし、その後何度か二人で会った。

未だに彼への未練を引きずっている私は、どうしても彼と比べてしまう。

近所の山で木こりをしているその人は、日焼けして荒れた肌が手も顔も傷だらけ。おまけに無愛想で口べたなため、話しても会話が続かない。

華やかな町で客商売をしている社交的な彼に比べて、かなり見劣りした。

真面目で実直、それだけが取り柄のつまらない男。けれど何も持たない私には、お似合いかもしれぬ。

現実はこのなものだ。彼と過ごした日々が、一時の夢だったのだ。農家の三男坊が、木こりの若者になつただけだ。

諦め気分の私が嫌な顔もせず、誘われるままにその人と何度も出かけているうちに、とんとん拍子に話は進んだ。

そして私は、その人と結婚する事になつた。

彼が私を捜しているような気配は、一度もなかつた。

伯母から結婚前夜、その人が私の事情を全て知っている事を訊かされた。だからきつと優しく接してくれるはずだから、幸せになりなさいと。

男に裏切られた傷物の娘を憐れんで、伯母に頼まれ仕方なく嫁にもらつたのだと思うと、悔しくて涙が溢れた。けれど今さらどうしようもない。

夫となつたその人は、初夜の床で初めて私に触れた時、眩しそうに目を細め穏やかに微笑んだ。

後にも先にも、夫のそんな笑顔が私に向けられたのはその時だけだ。

結婚して少しした頃、夫は突然木こりを辞めた。子供が出来れば金が必要になるから、もつと実入りのいい仕事に就きたいと言ふ。私たちは仕事を求めて、遠くの町へ引越した。以来、伯母とは疎遠になった。

新しい町の造船所で、夫は古い船のサビ落としや船倉の掃除などをする、肉体労働の仕事に就いた。

木こりより実入りはいいが、決して高給ではない。私も同じ造船所で働いた。

けれど程なく私は妊娠し、肉体労働が出来なくなつて仕事を辞めた。

最初の子は女の子だった。翌年また、女の子を産んだ。

結婚後も夫は、相変わらず無口で無愛想で、淡々と結婚生活を送つていた。けれど意外に子煩悩で、二人の子供を可愛がつてくれた。

三人目を身ごもつた時、私は産むのをためらつた。

小さい子供を二人も抱えて、私はずっと働けずにいる。夫の安月給だけで、三人の子供を育てられるわけがない。

産んでくれと手放して喜ぶ夫に、私は冷たく言い放つた。

「子供を育てるにはお金がかかるの。産んで欲しかったら、女房を働かせなくてもいいくらい稼いできて」

私の心ない言葉に、夫は怒るでも反論するでもなく、黙つて中絶を承諾した。

墮胎した子は、夫の欲しがつていた男の子だった。

その時を境に、私たちは肌を合わせる事がなくなった。夫はとうとう私に愛想を尽かしたのかもしれない。

最初から愛などなかった。けれど一緒に暮らし、肌を合わせているうちに、情も湧いてくる。

近所に友人知人が増えるにつれ、他人の話を聞くうちに、私は随

分いい人と結婚したのだと悟った。

私は夫を拒みはしなかったが、受け入れてもいなかった。素っ気なく冷たい私に、真面目な夫は、浮気もせず、手を挙げる事もなく、無愛想ながらも優しく接してくれる。

愛想を尽かされて、初めて気付いた。そんな優しい夫を、私は愛し始めていたのだ。

愛されていない事、愛想を尽かされた事が、こんなに悲しいと思えるほどに。

私に触れる事がなくなってからも、夫の態度は変わる事がなかった。

根が優しい人なのだろう。子供がいるから、別れようと言えないだけなのだ。

私の言葉を気にしたのか、夫は免許を取り、重機の運転手となって収入も増えた。

子供の手が離れると、私も再び働きに出て、二人の娘達をなんとか大学に行かせる事が出来た。

やがて娘達は就職し、少ししてそれぞれ嫁いでいくと、また二人きりの生活が戻って来た。

互いの間に会話はほとんどない。時々娘達が連れてくる孫と会うのが、唯一の楽しみだった。

夫が定年を迎え、二人でいる時間が増えても、会話が増える事はない。

無口で無愛想な夫は友達も少ない。時々近所の老人会に誘われてカラオケに行く以外は、ほとんど家にいて、本を読むかテレビを見て過ごした。

定年を過ぎた夫なんて、どこも似たようなものよ、と近所の奥さん達は言う。仕事しかしていなかったような人は、特にそうだと。

夫は私と結婚して、まさに仕事しかしていなかった。

夫にどんな趣味があるのか、どんな事に興味を持っているのか、私は全く知らない。知ろうともしていなかった。

寄る年波には勝てず、私も夫も年々体力が衰えていく。このまま家に引きこもる生活を続けていると、益々衰えてしまうだろう。

近所に出来た家庭菜園の土地を借りて、野菜でも作ってはどうかと、私は夫に勧めた。夫はあっさり了承し、野菜作りを始めた。

働いていた時のように、毎日お茶と弁当を持って出かけては、夕方に戻ってくる。何事にも真面目な夫は、私に与えられた新しい仕事だとも思っているのかもしれない。

気になって様子を見に行ってみると、夫は真剣な表情で野菜の世話をしていた。けれどどころなしか楽しそうにも見える。土いじりは好きだったのかもしれない。

私は気付かれないように、そっと畑を後にした。

しばらくして夫が病に倒れた。手術で一命は取り止めたものの、その後も入院を繰り返した。

そしてとうとう退院できなくなった。

年齢的にも、もう一度手術をするのは難しいだろうと医師は言う。元々細かった夫は、益々痩せて細くなった。最近は薬の影響なのか、日中でもうつらうつらしている事が多い。

頭はすっかりしているようで、娘や孫が見舞いに来た時だけ嬉しそうにしていた。

そろそろ危ないかもしれないと言われ、私は出来るだけ夫の側にいるようにしていた。

てつきり眠っているものだと思っていた。いきなり手を握られ、思ってもみない事を言われ、私は夫を見つめ返した。

夫は笑みを湛えたまま、しみじみと言う。

「お母さんには苦勞をかけたなあ」

「……とつくに愛想を尽かされてると思ってたわ。お父さんこそ、私と一緒にいて辛かったでしょう？」

「何言ってる。おまえの伯母さんに散々頼み込んで、やっと会わせてもらったんだ」

「え？」

そんな話は初めて聞いた。唾然とする私に、夫は今頃になって当時の経緯を話してくれた。

当時の私は、毎朝洗濯物を干しに庭先に出ていた。それを仕事で山に向かう夫が、通りすがりに毎日目にしていたのだ。夫は私に一目惚れしたのだと言う。

会わせてくれるように伯母に頼んだら、最初は断られたらしい。男に裏切られて傷ついているから、そつとしておいて欲しいと。

それでも諦めきれなかった夫は、一度でいいから話がしたいと何度も頼んだ。

無口で口べたな夫にしては、相当頑張ったのではないだろうか。

とうとう伯母も根負けして、私に話を通したのだ。

「嫁に来てくれると聞いた時は小躍りしたよ。辛いわけないだろう。一緒にいてくれるだけで幸せだった」

夫は一層目を細め、照れくさそうに笑った。

「ごめんなさい。私、あなたは伯母さんに頼まれて、仕方なく私を嫁にもらったんだと思ってたの。だから愛されてるとは思ってなかった」

重ねられた夫の手に、少し力が加わる。

「辛かったのはおまえの方だろう？ 俺はずっと後悔していた。おまえが裏切った男に未練を残しているのは知っていたからな。俺はそいつからおまえを奪った事になる。おまえを嫁にもらってからも不安でしようがなかった。そいつが迎えに来たら、おまえは行ってしまう。それが嫌で、逃げるように引越したんだ。俺のわがままに付き合わせてすまなかった」

「謝らないで。あの人とは終わってたの。私はお父さんが好きよ。私の方こそ優しくできなくてごめんなさい」

「お母さんは優しいよ。俺なんかに一生添い遂げてくれた。長い間、ありがとう」

微笑んだ夫の目がゆっくりと閉じられ、握った手からスツと力が抜けた。

「お父さん？」

異変に気付き声をかける。だが返事はない。

「お父さん！」

今度は腕を揺すってみた。夫の反応はない。

「いやよ、お父さん！」

私は狂ったように泣き叫びながら、ナースコールのボタンを何度も押した。

なんて愚かな人生を送ってきたのだろう。私は夫の事も伯母の事も誤解していた。謝りたくても伯母は、もうこの世にはいない。

せめて夫には償わせて欲しい。

(神様、後ほんの少しでいいから、この人を連れて行かないで！)

私は祈った事もない神に縋った。

数時間後、夫は意識を取り戻した。病室に戻された夫に面会に行くと、彼は弱々しく笑いながら言った。

「お母さんが泣くから、逝きそびれたよ」

「まだ逝かなくていいから、元気になつて。今度は一緒に畑をしましょ」

「ああ。それは楽しそうだな」

夫は嬉しそうに目を細め、それからふと思い出したように尋ねた。

「今日は何日だ？」

私が日付を答えると、夫は少し残念そうに小さく息をついた。

「そうか。結婚記念日は過ぎてしまったんだな。今年は五十年目だつたんだが」

言われて初めて気が付いた。私はすっかり忘れていたのに、夫は律儀に覚えていたのだ。

あの頃は貧しくて結婚式も挙げられなかった。記念写真を一枚撮っただけだ。

銀婚式にも何も出来なかったので、金婚式には何か贈り物をしようと思つて夫は考えていたらしい。

夫は枕元に置かれたティッシュペーパーを一枚取り、細く裂いてこよりをより始めた。

そして私の手を取り、

「薬指でよかつたよな」

そう言いながら、指にこよりを結んだ。

「こんな物ですまないな。五十年間ありがとう」

申し訳なさそうに苦笑する夫に、私は深々と頭を下げる。

「いいえ。これからも、よろしく願います」

紙で出来た白い指輪は、どんな高価な宝石よりも、ずっと尊い物に思えた。

(完)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9454t/>

---

白い金の輪

2011年10月8日03時10分発行